



# PROLOGUE

～ 6 人の料理人～

—晩餐会—

年に一度開催される料理人の登竜門。  
料理界の巨匠・美藤シェフの死後、美藤夫人が開催する食事会。  
将来有望とされる料理人が招かれ、その腕を振るってきた。  
この会で夫人の納得のいく料理を出せた者は、  
その後の料理人としての人生の成功は約束され、  
夫人に料理を認められなかった者は、  
二度と表に出てくることはないという…

バスに長い間揺られて、着いた時には辺りは真っ暗だった。

「ふう、やっと着いた」

孫一は思わずため息をついた。そしてカバンから一枚の紙を取り出した。その紙には、

「カレー屋・佐々木孫一を晚餐会に招待する」

という旨も文章が綴られていた。

孫一はふと、隣にあるバス停の時刻表を眺め、今自分が乗ってきたバスが本日最終のバスだったことを確認しより一層疲れの色を濃くし、歩き出した。

しばらく歩くと大きな館が見えてきた。中央に一棟、左右に巨大な塔のような建物が一つずつ、そして奥には中央の建物をさらに巨大にしたようなものが一つ。

中央の棟の、恐らく二階あたりから伸びているであろう渡り廊下がそれぞれの棟と中央の棟を結んでいた。

「館」というよりはむしろ「要塞」に近いルックスだ。

その大きさに比べ窓が極端に小さく、少ない事も、孫一にそのような印象を与えた一つの要因だろう。

「佐々木様！お待ちしておりました。」

不意に誰かに声をかけられた。声のした方を見てみると、そこには黒いスーツを着た、一目で「執事的な人」だと分かるおじいさんが立っていた。

「皆様既にお揃いですので、お料理のしやすい格好にお着替えになって食堂でお待ちください。」

孫一は館へ迎え入れられ、指示に従い持参したコックコートに着替え、食堂に入った。

既に何人かの人々が座っていたので、軽く会釈をしながら空いている席に座り、それから20分ほど経った時、急に大きな声を出す者がいた。

「まったくいつまで待たせんのよ！！」

首に麦わら帽子のゴムを引っ掛け、紺のエプロンを着た派手な金髪ツインテールの少女が腕を組んで怒鳴った。

「おいおい、5分や10分くらい大人しく待てねーのか  
オメーは」

今度はノースリーブの袴のようなモノを着た無精髭の男がキョトンとした顔でソレに反応した。

「15分よ！」

と夫婦漫才のようなテンポで会話が繰り広げられていく、恐らく晚餐会に招待されているであろう6人の料理人は、孫一の到着で全員揃ったようだが、集合時間を約15分程過ぎてても次の指示が何もないため、少女は怒っているようだ。

「そうですぞ、騒いだところで…」

「ウルセエ」

袴を着たオカッパ頭の男も少女の制止に加勢しようとしたところ、緑色のエプロンを着たツンツン金髪ヘアーの男に遮られた。なにやら険悪な雰囲気だ。

「み、みなさん喧嘩は…」

割烹着を着たメガネの少女がなだめようとしたとき、先ほどの執事っぽいおじいさんが食堂に入ってきた。

少し息が上がっていて疲れている様子だ。

指定してきた時間よりも

遅い登場だったことも相まって「何かあったのだろうか」と思うには十分な状況だった。

言い争いをしていた料理人たちも少し呆気にとられたような顔をしておじいさんの方を見た。

おじいさんは静かになった事を確認し話し始めた。



「皆様、お待たせいたしました。」

皆様には只今より西棟に移動して頂き、お料理をして頂きます。道具や食材は西棟にあるもの、何でも使ってもらって構いません。使って頂くキッチンは、

西棟1階入って右手が佐々木様、左手が中山様

2階入って右手が荒間田様、左手が大善様

3階入って右手が一色様、左手が加藤様

でございます。

最後にもう一つ。

この本棟と西棟以外には決して入らないでください。

私は大広間にいますので分からないことや足りないものがあれば、お申し付けください。

それでは皆さん、移動を開始してください。」

終わり？という料理人たちの反応を他所におじいさんは食堂から出て行った。

孫一はとりあえず他の料理人たちに挨拶をしてから西棟とやらに向かうことにした。少しキョロキョロして声のかけやすそうな人から話しかけることにした。

「あの…」

「は、」

まず先程喧嘩の制止を試みようとしていたメガネの少女に声をかけた…のだが思いの外怯えられて少し傷ついた。

「あ、すみません…僕佐々木孫一っていいいます。

よろしくお願いします…」

「な、中山撫子（なかやま なでしこ）です…」

自己紹介をしたことで警戒心を解いてくれたのだろうか、続けて喋ってくれた。

「皆さんなんだか怖い人ばかりですね…」

同じことを思っているようで孫一は少し安心した。

「まあ今夜はあの晩餐会ですから……皆さん。ビリビリしているんでしょ……」

孫一が言うのと撫子は少し俯いた。彼女もこの会には思い入れがあるのだろう。いや、全員そうだ。この晩餐会は料理人としての人生が決まる会なのだから。

孫一は気を引き締め直し、撫子の得意料理が和食割烹であること、実家のお弁当屋さんの手伝いをしていること等を聞き西棟へ向かう撫子を見送った。

「おいおい早速ナンパかよ、やるなあボウズ」

急に後ろから方を組んできたのは無精髭の男だった。

「い、いやその……」

「おれは加藤蘭丸（かとう らんまる）だ！よろしくな」  
「あ、さ、佐々木孫一です。」

どうやら蘭丸は、孫一が自己紹介して回っていることを知っていてからかってきただけらしい。この人も陽気そうではなかった。少し汗臭いが……。

「さっきのじいさん、やけに疲れてたな。なんかあったのか？」  
蘭丸はさっきまでのおちゃらけたテンションを落ち着けて少し真剣な表情で言った。

確かにソレは孫一も気になっていた。そのことを伝えようとすると蘭丸は雑誌の切り抜きを渡してきた。どうやら蘭丸が毎号料理のレシピを載せている「週刊狩猟生活」という雑誌の最新号の切り抜きのようだ。蘭丸は一通り自慢話をして行ってしまった。

「週刊なんだ……」

「狩猟」というニッチなテーマを取り上げる雑誌が毎週出ていることに驚きながらも、次の料理人を  
探すことにした。

「あの、佐々木孫一といっています。今日はよろしくお願いします。」

孫一は勇気を振り絞ってさっきキレていた金髪ツインテールの少女に話しかけた。

「ん？ああ、一色真夏（いっしき まなか）よ」

お、意外と普通の反応だな、と安心してしていると真夏は続けた。

「あの執事、散々人を待たせといて詫びの一言も無いのかしら」  
まだキレているようだ：

実は孫一は前から真夏のことは知っていた。最近流行りの「農ガール」としてテレビや雑誌でちよくちよく見かける。

週刊狩猟生活のようなマイナー雑誌ではなく、マガ○ンやサ○デーのようなメジャーな雑誌でも表紙グラビアを飾るような有名人だ。家では農家の他にもカフェを経営していて畑で採れた果物を使ったジュースが大人気らしい。

「あはは：」

しかし触らぬ神に祟りなし、愛想笑いをして不機嫌そうな真夏から離れることにした。

するとやけに貫禄のある男が目に着いた。袴を着た男だ。

「あの、佐々木孫一といっています。」

今日はよろしくお願いします。」

「ウム、我は荒間田暖暖（あらまだ だんだん）。

よろしく願いますぞ。」

独特の名前と話し方に多少面食らったが、暖暖は続けた。

「やはり晩餐会。皆ピリピリしておりますな」

「荒間田さんは落ち着いていますね。」

袴を着ているせいもあるかもしれないが、暖暖の佇まいは迫力があつた。

「当たり前ですぞ。平常心以外有り得ませんな。

今日は頑張りましょうぞ。」

暖暖は自分の言葉に大きく頷き歩き出した。

孫一は暖暖のことも知っていた。全国にチェーン展開する

鍋料理店「鍋奉行」のオーナーだ。

「キャラ濃すぎだろ…」

マイペースな料理人達を前に圧倒され、伏せた顔を上げると染め直していないのだろうか、根元が黒くなってきているツンツン金髪の男と目が合った。

「おい！」

「はい！」

急に声をかけられ声が裏返ってしまった。

「なんか用か？」

「いえ、あ、佐々木孫一です。よろしくお願いします。」  
すぐにでもその場から逃げたかったが、気力だけで何とか名乗ることに成功した。

「あ？：おう、大善吾郎（だいせん ごろう）だ。」

ぶっきらぼうな口調だが、受け答えは普通だった。

大善はぬうっと顔を近づけてきた。

「ダイゴローって呼ぶなよ」

「え、は、はい」

意味深な一言を残してダイゴローは去っていった。

大善は鉄板料理人らしい。後で暖暖に聞いたのだが、大善は主に祭りに屋台として出店していて

巷では「お祭り男ダイゴロー」と呼ばれているらしい。

本人はあまり気に入っていないようだ。

一通り自己紹介を終え、さらに疲れた孫一は足を引きずるように西棟に向かい他の参加者同様料理を始めた。



しばらく料理していると孫一はあるスパイスが足りないことに気がついた。予備がないかさっきのおじいさんに聞きに、本棟の大広間に向かった。しかし大広間にはおじいさんの姿は無く、代わりに出入り口の扉の前で怪しい動きをしている蘭丸が目に入った。

「どうしたんですか？」

「いや、素手で猪でも獲って来ようと思ったんだけどよ、扉が開かねえんだわ」

「え？」

鍵をかけられたのだろうかと言ひ

「素手で」の部分はあるてスルーし、扉を確認したその時

「な、おじよ、うああああああああ」

突然男の叫び声がした。孫一は困惑し蘭丸の方へ目を向けたが、蘭丸は既に声のした北棟の方へ走っていた。孫一も慌てて蘭丸の後を追いかける。そして北棟へ続く扉の前で立ち止まった。先程のおじいさんの説明を思い出す。

「最後にもう一つ。」

この本棟と西棟以外には決して入らないでください。』  
だが孫一は言いようのない不安感に駆られ、北棟へと続く扉を開けてしまった。

次の瞬間孫一は暗闇に包まれるような感覚に陥った。思えばそれまで僅かに感じていた違和感の数々、それらと目の前の光景が繋がったような感覚と、にわかには信じられないという思いが一度に孫一を襲った。



# CHAPTER1

～館内コレクション～





「うわああ」

見てはいけないものを見てしまったように感じた孫一は、急いで浴槽の栓を抜いた。水が抜けたことを確認するためにもう一度浴槽を覗くと、排水口に何かのカギが引っかかっていた。とりあえずカギを拾い、その部屋を後にした。

廊下に誰もいないことを確認し、急いで隣の部屋に入った。

先ほどの部屋とはレイアウトは少し違うが、同じく客室らしい部屋だった。部屋を探索していると、また鍵が落ちていた。

「掃除に入っていないのか」

あまりにも落し物らしきものが多いので思わずそうつぶやいてしまった。

北棟の二階を一通り見た孫一は慎重に一階に降りることにした。幸い何にも見つからずに一階にたどり着いた。

一階には部屋が三つあり一つはガラスでできた扉の部屋、他の二つは鍵のかかった部屋だった。一番手前の部屋の扉に最初の部屋で拾った鍵を差し込んでみるとうまく回った。

どうやらこの部屋は倉庫らしい。ところどころ蜘蛛の巣が張っている。部屋の奥に金庫のようなものを見つけた。

表示の指示通りに入力して開けてみると中には棍棒のようなものが入っていた。生地を伸ばすのに使うのだろうか……

とりあえず棍棒をしまいもう片方の鍵を使い隣の部屋に入った。先ほどの部屋と似たような雰囲気だったが野菜が入ったダンボールや冷蔵庫が置いてあるところを見ると

恐らく食材庫だろう。

「こんな風にしてたら悪くなっちゃうよ……」

無造作にダンボールに入れられている野菜を見ていてもたってもいられなくなった孫一は野菜を正しい保存場所にしまい直した。

空になったダンボールは小さくたたんでポッケに入れた。



そして一階最後の部屋、ガラスが張られた扉の部屋の中を覗くとそこには――

長包丁や鉄串のような武器になりそうなモノがあった。恐らく調理器具や食器を保管する倉庫だろう。

流石にこの状況。棍棒だけでは心もとないので、どうにかして部屋に入れないかと扉を確認するが、鍵穴もなく、ビクともしなかった。仕方なく持っていた棍棒でガラスを割り、中に入っていた。ガラスが予想よりも大きな音を立てて割れたので少し冷静になり後悔していると、足音が聞こえてきた。

孫一は咄嗟にポケットから先ほど手に入れたダンボールを取り出し、頭からかぶった。

ダンボールに空いた穴から外の様子が見える。

「ぐううううう、ああああああ」

「さっきの奴だ……」

体中が痺れるような恐怖に襲われながらも必死に息を潜めた。ピキッピシッ

孫一が割ったガラスを踏む音が部屋に響く。

「早く終わってくれ……」

「るううううう」

一通り部屋を見たその影は、部屋から出て行った。

「何なんだ……アレ……」

まだドクドク鳴っている胸を押さえて、武器を探し始めた。しばらく食器庫で息を整えてから、まだ見ていない三階に向かうことにした。

さながらスニーキングミッションのような足取りで全身の神経を耳と鼻に総動員し、警戒に警戒を重ね3階にたどり着き、一番手前の部屋に入った。



「書庫か…」

学校の図書室のように規則正しく並べられた本棚と、埃っぽい本達を見てそう判断した。

脇に落ちていた紙に目を落とすと、ある文字が目についた。

「歴代晩餐会優秀者

：

咲賀谷朱花：アメリカ菓子

田村直江津：ハンバーグ

戸塚大宝：○○料理」

「咲賀谷さんに田村さん、どっちも有名な料理人だ…」

歴代の優秀者の名前を再確認し、晩餐会が如何に重大なイベントかを改めて思い知る。と、同時に自分が置かれている状況に対する違和感がさらに強くなった。

もちろん「人が死んでいる」というだけでも気が遠くなる程の非日常なのだが、ソレがあ晩餐会で起きていることが孫一をより一層困惑させた。

ふうとため息をつき手近なところにある本を手にとってみた。

「カニバリズムとクールー病」

カニバリズムというのは聞いたことがある。

確かに人間を食肉とする文化だ。その本によると、

「クールー病」という病は

脳機能障害や言語障害を引き起こす病気で、

死んだ人間の体内に蓄積された悪性のタンパク質を

摂取することで発症するらしい。致死率はほぼ百パーセントで

治療法はまだ見つかっていないらしい。

似たような病気に、一時期日本でも話題になった狂牛病がある。

アレの人版のようなものだ。

出口の手がかりになりそうなものがないことを確認すると、

書庫を出た。

廊下に出てみるとそこにはとなりの部屋の扉に手をかける  
蘭丸の姿があった。

緊張の連続だったこともあり、言いようのない安心感を感じた、  
のだが蘭丸は何やら怖い顔をしていた。

蘭丸もコチラに気づいたようだ。

「こん中だ…」

？となったが次の瞬間状況を察して鼓動が速くなるのを感じた。  
恐らくこの中におじいさんを殺した何かがいるのだろう。

「いくぞ」

「え？」

返事も待たずに蘭丸は中に入ってしまった。

思わず急いで後を追いかけてしまった。

しかし、部屋の中には何もいなかった。代わりに大きなピアノや  
弦楽器。譜面台などが置いてあった。音楽室のようだ。

そこでなにやら異臭がすることに気がつく。

臭いがする方を見ると蘭丸がしゃがんでいた。

「加藤さ…」

「血だ」

蘭丸は異臭の正体を突き止めたらしい。覗き込んでみると確かに  
血だまりのようなものができている。

その時、後ろになにかの気配を感じて振り返った。

そこには一人の女の子が立っていた。



目を見開き、肩をすくめ、その姿はまるで威嚇をする猫のようだった。

「君は…」

「アブねえ！」

孫一が少女に問いかけようとしたのと

蘭丸が怒鳴り孫一を突き飛ばしたのと

少女が地面を蹴ったのはほぼ同時だっただろう。

起き上がりながら蘭丸の方を見ると、

少女が蘭丸の腕に噛み付いていた。蘭丸が少女を引き剥がすと

少女は部屋から出ていった。

「今のは…」

目の前で起きたことがあまりにも常軌を逸していたので

蘭丸に助けを求めた。

蘭丸は腕を押さえながら答えた。

「じいさんを殺したのは多分あいつだろう」

見ると蘭丸の腕も食いちぎられていた。

「大丈夫ですか！！」

「ああ、けど普通の人間の動きじゃなかったな…」

あいつらを集めろ」

ここであの少女を逃がしてしまった事に対する責任と、

これ以上は他の料理人にも危険が及ぶと判断したのだろう。

蘭丸は自分の怪我の応急処置をさっさと済ませて

次の指示を出した。

孫一はすぐに西棟へ行き、皆に食堂に来るように行った。







# CHAPTER2

～神待ちdiary～

「要するにこの館には人を殺す化物がいて、出口も見つからないと、そういうことですな」

皆を食堂に集め、それまでの出来事を一通り説明すると、暖暖がまとめるように発言した。

「ねえ！どーすんのよ」

「…」

「とにかく今は出口を探さないで…」

あの娘を捕まえるのも危なそうだし…」

蘭丸に傷を負わせるほどの少女だ。出会わずに解決するのが最も好ましい。取り乱す真夏と撫子に解決策を提示した。

「おう、だが館内は危険だ。絶対に一人にはなるなよ。」

山中と一色はここにいろ。鍵もかけとけ

俺は荒間田と、佐々木はダイゴローと出口を探してくれ。」

俺の名前は太善吾郎だ！善を抜かすなコラ」

怒る太善をあしらうように謝罪した後、蘭丸は号令をかけた。

「じゃあ行くか」

7

にしてもだ。よりもよって太善と組むことになってしまった。正直他の5人の中で一番怖いのはこの男だ。

見るからにヤンキーなルックス、鋭い目つき、言動…

「よろしく願います…」

恐る恐る挨拶をして、まだ見ていない東棟へと向かった。

東棟へと続く渡り廊下に入ると、急に太善が口を開いた。

「卵だ」

「え？」

と太善の視線の先に目を向けると、なるほど確かに卵が落ちている。ついでに壁際に置いてある机の上にも卵が二つ乗っている。



「コイツは取れて一週間くらいだがこっちは新鮮な卵だな  
コレはもうちょいで賞味期限だ」

卵を拾い上げながら採卵日を言い当てる大善を見て  
「となりのトトロ」のメイちゃんがどんぐりを拾うシーンを  
思い出して笑ってしまった。

「なんだ？」

「い、いえ凄いですね。」

「まあ卵は毎日見てるからな」

大善は頬をポリポリ搔きながら恥ずかしそうに言った。  
見た目は怖いが大善の料理人らしい一面と  
子供のような一面を見て少し親近感を覚えた。

「ほれ、いくぞ」

いつまでもニヤニヤしていた孫一を急かすように大善は言った。

「は、はい」

大善の後を追いつ、東棟へと入っていった。

左右に扉がひとつずつ付いている長い廊下に出た。

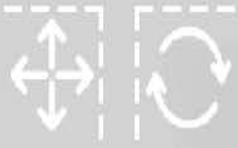
「とりあえず入るぞ」

少しも臆する様子を見せず右手の扉を開ける大善に続いて  
部屋に入っていた。

「ん？」

大善は何かを見つけたようだ。

孫一も大善の手を覗き込んでみた。  
日記のようだった。



―〇月×日―

最近娘の食欲がない、お父さんの作った〇〇〇  
なら食べられるみたい。  
少し心配



ソレは美藤夫人が書いたらしいモノだった。

「夫人には娘さんがいたのか……」

「なあ、お前美藤夫人に会ったか？」

そういえばそうだ。この晩餐会の主催者である美藤夫人はまだ一度も姿を見せていない。

それまでのアリエナイ事の連続ですっかり意識から外れていたが、この状況。夫人は何処でどうしているのだろうか。

「いえ……」

もしかしたらもう先程の少女に殺されてしまったのか……

「まあいい、行くぞ」

一行は一階に向かうことにした。

ギィィィ。後ろを警戒する孫一とは裏腹に大善はどんどん進み部屋に入っていく。

そこは大きなキッチンやテーブルがある、ダイニングルームのような場所だった。

テーブルの上に紙が置いてある。

「目玉焼き

ゆで玉子

茶碗蒸し」

？

「なんだろうコレ……大善さ……

何やってるんですか！」

目の前の光景に目を疑い、思わず大声を出してしまった。大善は料理を始めていたのだ。

「見りゃわかんذار、ソレ作ってんだよ

晩餐会のお題かも知んねえذار」

言いながら先程拾った卵で紙に書いてあった料理を次々に作っていった。

「目玉焼きは新鮮な卵で、卵焼きは中間期、

茶碗蒸しは賞味期限前でも美味くできんだよ。」

呆氣にとられていると後ろから声がした。

「何やら騒がしいと思ったらお前ら、次の候補者か？」

いつの間に部屋に入ってきたのだろう。いつから居たのだろう。

そこには銀色の髪を肩の下あたりまで伸ばし、

白衣のようなものを着た男が不気味な笑みを浮かべて立っていた。

「なんだてめえ？」

大善は男を睨みつけた。

「そう身構えなさんな兄ちゃん。あとそいつあ

お題なんかじゃあねえよ」

男は言い終えると視線をやや下に向け、

再びニヤッと笑うと言った。

「面白いモンやるよ」

男は一冊の本を投げ渡してきた。

「お前らが知りたいことのヒントになるかもなあ」

そう言って男は部屋から出ていった。

「おい、待てよ」

大善は男の後を追ったが、既に姿はなかった。

「とりあえずこれを見てみましょう」

不気味な男ではあったが普通の人間そうだったので大丈夫だと

判断し、渡された本を開いて大善のところに駆け寄った。

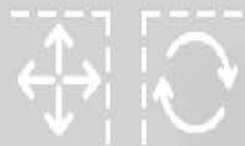
日記のようだった。

―△月□日―

何も口にしなくなってから五日。  
ほとんど口もきけなくなっている。



7/14



90 MENU

「娘さんはどうやら思い病気にかかっているみたいですね」  
「いいから、次次」  
急かす大善に従い、ページをペラペラとめくった。



―◇月△日―

今度はお父さんの両目がえぐられた。  
お父さんは死んでしまったけれど  
何とかあの子の食べられるものも分かった。  
仕方がない



7/14

90 MENU

「これは…」  
「お父さんってーのは美藤シェフのことだよな」  
恐る恐るページをさらにめくった。

―▽月＊日―

今日は二人、  
一人は燻製にした  
もう一人はそのままた。

「一人：燻製？」

思わず声に出して確認してしまった。

それ以降は人数と調理法がそれぞれ綴られていた。

手掛かりがあったような余計分からなくなったような、

これまでの出来事は二人で受け止めるにはあまりに大きすぎると

判断し、大善に一旦食堂に戻ることを提案した。

「他の奴等の様子も気になるしな」

大善も同意し、二人は食堂へ向かった。

7 / 14







# CHAPTER2

～襲撃の住人～

「それで？出口は見つかったの？」

食堂には既に蘭丸と暖暖も戻っていた。孫一達が食堂に戻ると真夏は腕を組んで高圧的な口調で問いただしてきた。

「いやあ…」

「ホント使えないわね」

真夏の勢いに押され曖昧な返答を投げるも怒られてしまった。面目ない。

「まあまあ、でも色々手掛かり？は見つけたぜ

なあ荒間田」

真夏をなだめるように蘭丸が言うと、暖暖は探索で見つけたものを話し始めた。

東棟が美藤家族の居住スペースだったこと。

それぞれ階にどんな部屋があったのか。

孫一はそれに付け足すようにあの日記のことも話した。

「なるほど」

と孫一が話し終わると暖暖が頷きながら言った。

「謎は解けましたぞ。実は我々は北棟も見直したのですぞ  
そこには少し特殊な本がびっしり詰まった

図書室がありましたな」

孫一も図書室の事を思い出す。一確かカニバリズムについての―  
「恐らく夫人はその日記に書いてあるような事態を前にして

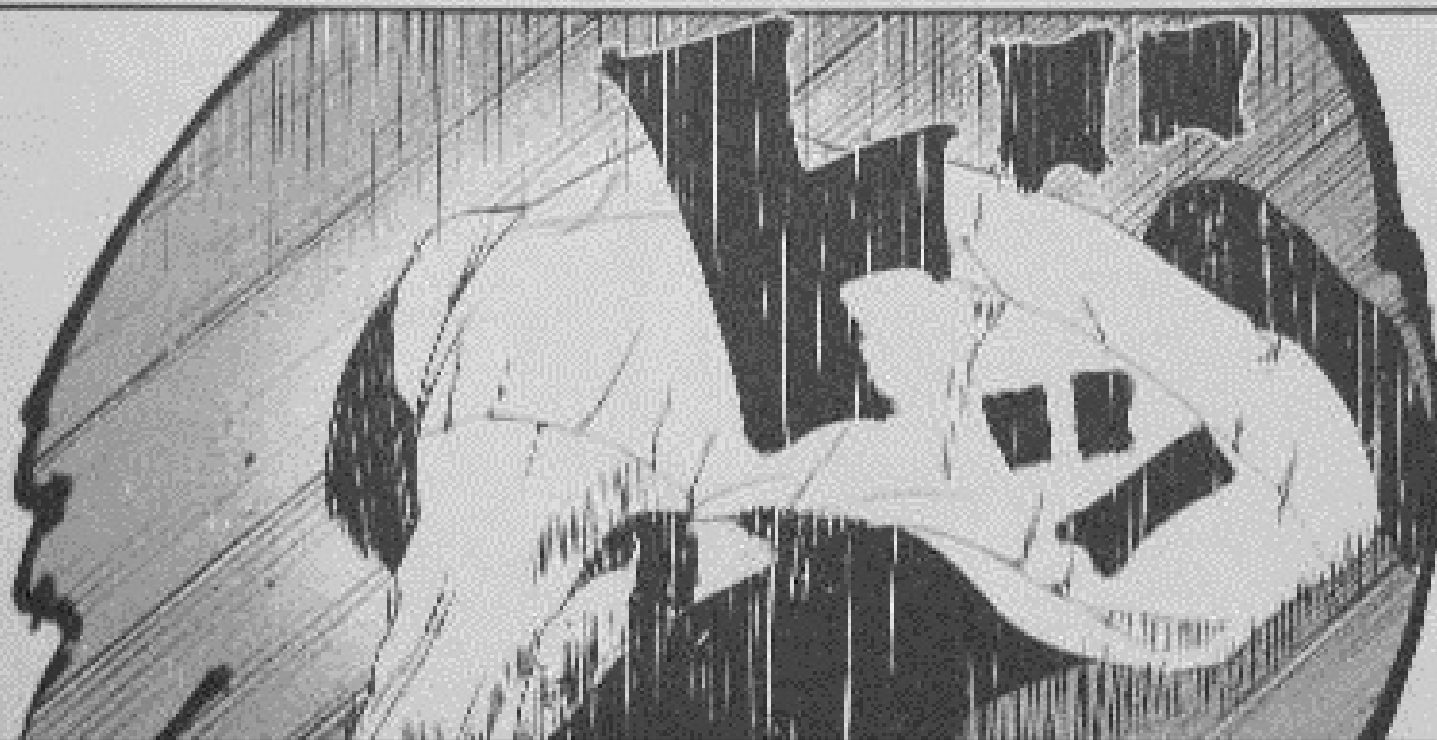
アレらの資料を集めたと考えられますな」

「だからどういう事よ！」

実際に北棟をまだ見ていない真夏が暖暖を急かすように叫んだ。  
「説明しますぞ」



ええええええ



うおおおお

美藤夫人には娘がいて、偏食症を患っていたと考えられますぞ  
そして、日に日に食べられるものが減っていき  
最終的には一切の食べ物を食べなくなってしまうらしいですぞ



しかしある日、そんな娘さんでも食べられるものを見つけたらしいですぞ  
それは一





美藤シェフ、人間ですな  
恐らくシェフ以外にも多くの人間を捕えて、食肉にしているみたいですぞ  
この館で…



ときに皆の衆、狂牛病というのは聞いたことがありますな？  
アレは牛に牛を食べさせたことに端を発している病ですな  
美藤さんの娘さんはそれの人版である「クールー病」  
いわば狂人病とでも言うべき病を患っていると考えられますな  
症状の一つである脳機能障害により、筋力を制御する脳のリミッターが外れ  
人間離れした動きをしていると考えられますな

狂人病：

人が人を食べることにより発症する病：  
夫人の娘さんがその病にかかっている？  
ではあの少女が夫人の娘さんなのか：

「おそらく我らもこのままでは：」

暖暖が言いかけたとき食堂の扉が勢いよく開いた。

その場にいた一同が音のした方に目を向けるとそこには――  
あの少女が立っていた。

「あ：」

瞬間少女は襲いかかってきた。思わず目をつぶってしまう。

「ぬう：」

恐る恐る目を開けてみると血眼になっている少女を蘭丸が  
食い止めていた。

「お前らはとにかくここから出る！」

蘭丸を置いていって大丈夫だろうか：と躊躇ったのも束の間  
暖暖に背中を押されて扉の方へ向かった。

「行きますぞ」

どうやら蘭丸以外の五人は食堂からの脱出に成功したらしい。

全員の無事を確認した大善が孫一、暖暖に向かって言った。

「加藤に加勢するぞ」

どうやら大善も、蘭丸一人に任せるのは不安だと感じたらしい。

武術家としても実力者である加藤蘭丸だが、

それ程の禍々しさがあの娘にはあった。

「加藤もいりゃあ何とかなんだろ」

確かに恐怖はあったが、あの娘さえ押さえればこの状況を  
打破できる。そう考えた孫一は大善の案に乗ることにした。

「ですな」

だんだんも頷き、三人で食堂へと戻っていった。

が、そこに広がる光景を見て意識がはるかに遠くなるのを感じた。

蘭丸は倒れていた。

顔の中央やや上部分、本来なら目があった位置には真っ黒い穴が二つ空いており、そこからはまだ鮮やかな血が流れていた。目の前の現実を受け止めきれずに呆然と立ち尽くす孫一を暖暖の一言が我に返した。

「あの娘は……」

そうだ、あの娘がまだいるんだった。すぐに動けるように重心を低くし、食堂内を見回した。しかしそこには娘の姿はなかった。

「出入り口はソコだけなのに……」

と今自分たちが入ってきた扉を見ながら暖暖が呟いた。

するとその扉から恐る恐る顔を覗かせた真夏と撫子の二人と目があった。中の状況を確認したのか、撫子はどこかへ走り去ってしまった。真夏もソレを追うように逃げていった。

「中山さん！一色さん！」

急いで二人の後を追いかけるが、撫子が東棟の方へ走っていくのは見えたが、真夏は見失ってしまった。

「チィ、中山と一色探すぞ」

「我も行きますぞ」

「俺は東棟を見てくる」

「我は北棟を見えますぞ、

佐々木氏は西棟を頼みましたぞ」

大善と荒間田はテキパキと指示を出すと、食堂から出ていった。

それにしてもあの娘はどこへいったのだろう……

あの扉の他に出入りできるような所はどこも……

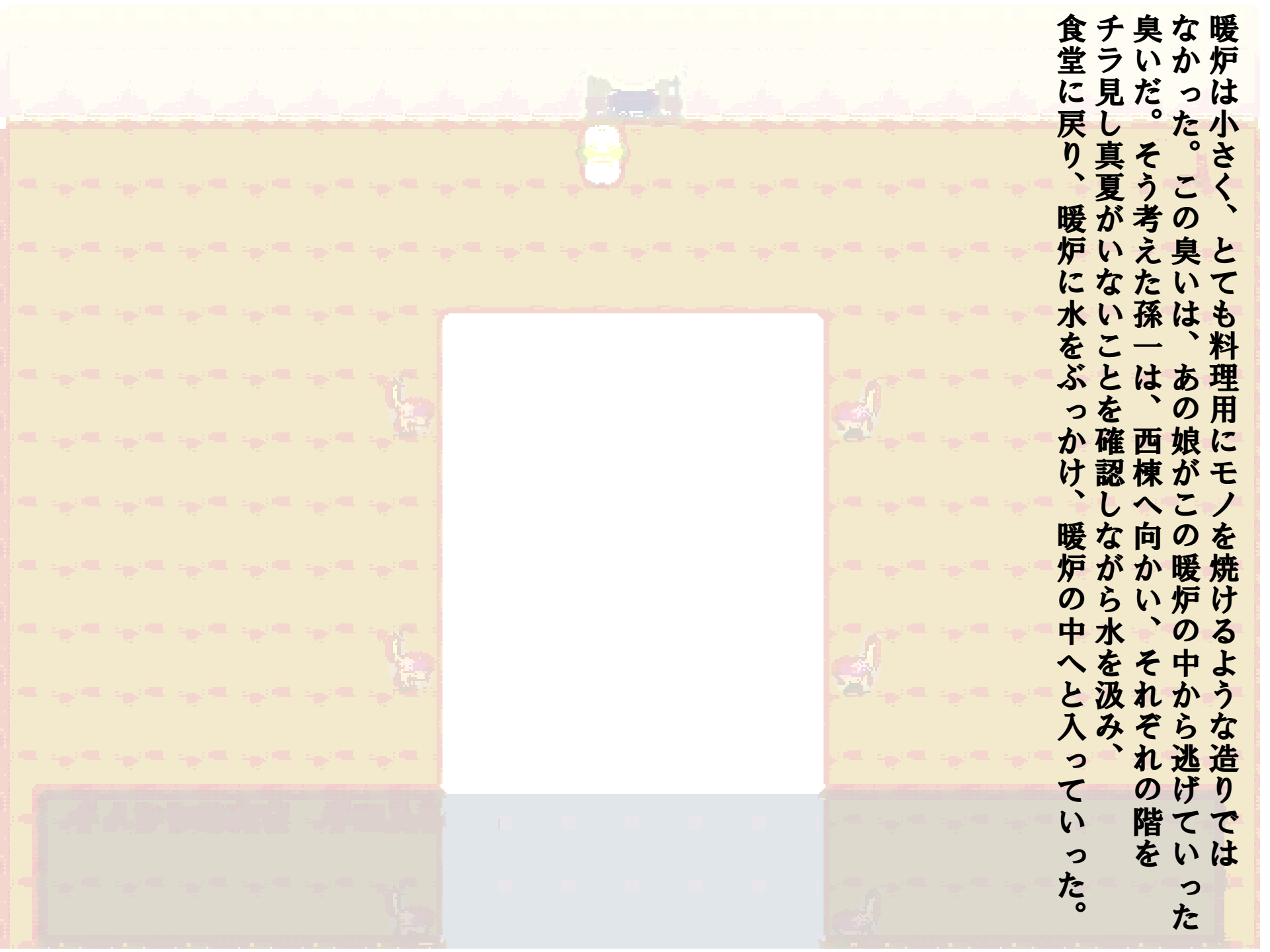
などと考えていた孫一の目に映ったのは、暖炉だった。

パチパチと火を立てている暖炉。この中に入るなど

普通の思考では有り得ないが、その火の臭いを嗅いで確信した。肉が焼けるような臭いがしたのだ。恐らくこの火の中に生物が入ったのだろう。



暖炉は小さく、とても料理用にモノを焼けるような造りではなかった。この臭いは、あの娘がこの暖炉の中から逃げていった臭いだ。そう考えた孫一は、西棟へ向かい、それぞれの階をチラ見し真夏がいなかったことを確認しながら水を汲み、食堂に戻り、暖炉に水をぶっかけ、暖炉の中へと入っていった。



―孫一が暖炉の中へと入っていったのとほぼ同時刻  
東棟一階、子供部屋にて―

そこには東棟で孫一、大善の前に姿を現した  
白衣の男と中山撫子の姿があった。

「なるほど事情はわかった。それなら教えてやるよ  
この晩餐会での、必勝法をなあ」

男は目をギラつかせながら言った。

「その、あ…貴方は？」

「俺か？俺あ戸塚大宝。人肉料理の戸塚大宝だあ」

# CHAPTER 3

~~

そして再び話は孫一に戻る。

暖炉の中へと入ってみると、そこには恐らく地下へと続いているであろう階段があった。

階段を降りきるとそこは、壁にかかっている三本の松明の明かりが見えるだけで、あとは全くの暗闇だった。

しかし、館内に出口がないことを確認済みだった孫一には地下の探索をする以外の選択肢はなかった。

壁にかかっている松明を一本取り上げ、自分が今いる部屋を見て回ると、その部屋には北へと伸びる通路と東へと伸びる通路が一本ずつ。それから鍵のかかった扉がひとつあった。とりあえず北へと伸びる通路へ向かってみたが、そこは貯水湖の様な所に繋がっており、流石に泳いでまで探索する勇気のなかった孫一は引き返し、東の通路へ入った。

しばらく歩くと両側の壁が途切れた。どうやら大きなスペースに出たらしい。左手の壁を照らしてみると、鉄格子のようなものが見えた。

「檻……？」

とつぶやいた次の瞬間、ガシャンという大きな音とともに、鉄格子の向こう側から顔中吹き出物だらけの男が飛びかかってきた。幸い檻のおかげで

うわぁ、と情けない声を上げ、もちをつくだけで済んだが……

「酒……酒……」

そう呟く男から逃げるように、檻の反対側の壁に付いていた扉の中に入った。

今度は、先程の部屋で鉄格子があったところにガラスの壁がある。中には人間の姿があった。

ショーケース：のつもりだろうか：なんとも悪趣味だ。

その部屋には鍵のかかった扉がひとつ、南へとのびる通路が一本あったので孫一は通路に入り次の部屋へと入り探索していると、

鍵を見つけた。お約束である。

鍵をしまっていると、何者かの気配がしたので振り向いた。

そこには撫子の姿があった。

ナゼここに？という疑問が浮かんだが

「中山さん、無事ですか」

という問いが口をついて出た。

撫子は目をそらすと、孫一を突き飛ばした。

孫一が突き飛ばされた方には壁がなく、代わりに、さらに下へとのびる急なスロープがあった。

「佐々木くん：ごめんなさい」

撫子はそう言うところかへ走り去ってしまった。

孫一は状況が飲み込めないままスロープを転がり落ちる。

やがて底へと着いた。何かがクッションとなり

怪我こそなかったが、松明を失ってしまったので

その部屋の壁にかかっている松明を手に取り足元を照らした。

そこには何かの骨のようなものが敷き詰められていた。

中には髑髏のようなものもあったので恐らく人間のものだろう。小さい虫がわらわらと群がっているものもある。

ここから上へ上がるのは大変そうだな：

自分が落ちてきたスロープを見上げる。壁のかなり上の方にスロープへの入口があるため、まずはそこまで登る必要がある。



孫一は死体を積み上げ、踏み台にし、スロープへと到達し、  
這いずるようにしてスロープを登りきった。

「痛痛ッ」

スロープを登るときに爪が何本か剥がれてしまった。

「中山さん……」

自分が突き落とされたスロープに目を向けそう呟くと  
ガラスのショーケースの部屋へと戻っていった。

先ほど拾った鍵はこの部屋の扉の鍵だったらしい。

鍵は見事穴に刺さり、部屋に入れた。

その部屋には樽や木箱がたくさんあり、酒がたくさん入った棚、  
床には割れたワイン瓶なども散乱していた。

貯蔵庫だろうか。

ここで「酒……」と呟いていた囚人を思い出し、何かテキトーに  
持っていくことにした。

「あの……」

檻の前まで戻り、男に酒を差し出すと、男はソレをひったくり、  
グイッと飲むと満足そうに言った。

「坊主、話が分かるじゃねえか。新入りか？何でも聞けよ」

「新入り」という言葉の意味はよく分からなかったが、孫一は  
ここがなんなのか、出口の場所等知りたいことを質問した。

「ここは食料保管庫だ。他にもこんな部屋はあるし  
勿論調理用の部屋もある。出口なんか知ってたら

とっくに出てるわい」

食料というのが人間を指すことを確認し、気を引き締め直した。

「出口は分かんねえけどよ、向こうに湖みてえのがあったろ？

あそこの水は抜けんだよ。そのスイッチはこの先にある

「死体置き場の南の壁」にある」

死体置き場とは先程のスロープの下の部屋だろう。

出口を見つけたら知らせることを男に約束し、道中で

命綱替わりのロープを調達し死体置き場に向かった。

ロープを腰に巻きつけ、例のスイッチを押しに行った。ポチ、ジャアアとボタンを押すと水が流れるような音がした。再びスロープを登り、囚人に軽くお礼を言い、湖のあった場所へと向かった。

男の言ったとおり、そこには水はなく、歩いて進めるようになっていた。湖のそこだった部分に奥へと続く通路を見つけ、孫一はさらに進んでいった。先程まで湖の底だったからだろうか、ジメジメしていて生臭く、とても居心地の悪い通路だった。

通路を進むと分かれ道に出会った。北へと続く道が一本、西へと続く道が一本。孫一は真っ直ぐ北へと向かった。

すると後ろから、わささささああ、という音と共に大量の黒い物体が孫一の足元を通り過ぎ、通路の突き当たりにある扉へと吸い込まれていった。

孫一も恐る恐る扉の中に入った。

そこには、天井からロープで吊るされている何かがあった。しかしその「何か」には大量のゴキブリが群がっていて、驚いてソレが何なのかを確認する前に部屋から逃げ出してしまった。

その光景を思い出し、一旦戻してから先程の分かれ道の西へと向かう通路に入っていた。

「ああ、こんなトコまで来やがつて」

その通路の先にいたのは東棟で会った白衣の男、撫子に「戸塚大宝」と名乗ったあの男だった。

男は笑みを浮かべて言い放った。

「丁度いいや、この先の部屋に煙草落としちまつたんだ  
拾つてきてくれたらイイコト教えてやるよう」

この男は間違いなくココの事をよく知っている。

恐らく先程の囚人よりも。そう直感した孫一は、

この男に従うのが懸命だと考え、

その通路の先にある部屋の扉へと向かった。

そして扉を開いた。

その部屋には何人もの人がいた。

「がッ？」

気づかれた。と思った瞬間だった。その者達は孫一に

襲いかかってきた。急いで白衣の男がいたところまで戻った。

あの軍団はまだ追ってきている。

「何なんですかアレは！」

白衣の男にすがりつく

「本当に行くとはなあ」

白衣の男は愉快そうに笑いながら懷から刃物を取り出した。

白衣の男は、今尚孫一の方へ向かっている

不気味な者たちの一団へ突っ込んでいった。

速技だった。白衣の男は全員の動きを止めた。

「何をしたんですか？」

目の前で起きたことについて行けず、思わず聞いてしまった。

「手足の神経を切つたんだよ」

よく見ると男が手にしていた刃物はメスの様なものだった。

「よく頑張つたなあ。あの煙草はやるよ」

そう言う白衣の男は、動かなくなつた者達を数人担いで

先程孫一が開いた扉とは別の扉の中へと入っていった。

孫一はもう一度煙草を取りに行った。

「あったー」

煙草をポケットにしまいながら思い出した。

たしか虫は煙草の煙を嫌うとか何とか：

さっきのゴキブリ部屋にあったモノが気になった孫一は再びゴキブリ部屋に向かった。

何度見ても気持ち悪い光景だ。

ゴキブリが大量に群がっているのは。

部屋をよく見ると、ソコは燻製室のようだった。

本来木のチップをセットするであろう場所に煙草を入れ、部屋から出た。

しばらくして部屋の様子を見るために中に入ると、

天井から吊るされていたのは、

暖暖だった。

縄を解き急いで部屋から暖暖を連れ出した。

「大丈夫ですか！」

「うう」

相当弱っているようだ。どうやら暖暖は、北棟で撫子と合流し、撫子と共に食堂に戻る途中から記憶が曖昧らしい。とりあえず 暖暖を休ませ、先に進むことにした。

白衣の男と会った部屋、

あそこにはもう一つ別の扉があったはずだ。

白衣の男が入っていた扉、孫一は白衣の男が入っていた扉を開けた。

そこには見るも無残な光景が広がっていた。

床は血まみれ、何かの内蔵のようなものが一面に広がり……ん？

よく見ると――

真夏がうずくまっていた。

「一色さん！」

「……」

色々なモノを見てきたせいだろう、孫一の声に反応し、少しホッとした様子を見せるも、とても話せるような感じではなかった。

「あ、ああ、」

孫一を見つめる真夏の顔が見る見る恐怖に染まっていった。どうしたのか訪ねようとした瞬間何者かに髪をひっぱられ、床に叩きつけられた。

「一色さん！」

起き上がり、何とか状況を確認しようとするも、時すでに遅し。あの娘が真夏を連れ去るのが見えた。

娘を追ったが、かなりのスピード。すぐに見失ってしまった。

孫一は真夏救出のため、娘が入っていった通路を進み、先にある扉を開いた。

そこには、麻袋がたくさん浮いたプールのようなところだった。

プールサイドにも麻袋や人間の骨らしきもの、

死体が散乱している。そし歩いている。

間違いない、一色真夏はここにいる。そう確信した孫一は、娘から隠れながら真夏の搜索を始めた。

てあの娘の姿もあった。

ペタペタとプールサイドを歩いている。



そして、プールに金色の髪の毛らしきものが飛び出ている麻袋が浮いているのを見つけた。

「アレだー」

そう思った孫一は、浮いている麻袋で娘からの死角を作りながら真夏の元へ近寄った。

ぐ、足元には苔やらヘドロやらが溜まっていてヌメツとして歩きづらい。さっき剥がれた爪にも染みる。

オマケに水に一週間漬けたパンのような臭いがする。

最悪の気分だ。

そうして金髪の髪が飛び出ている麻袋に辿りつき、中を確認した。真夏が膝を抱える様な体勢で入っていた。意識はないようだった。物音を立てないように真夏をプールから上げ、プール部屋の出口に向かった。

「げほッげほッ」

真夏が水を吐き出した。

「ぎがっ？」

真夏の声に反応した娘がこちらに気づき、追いかけてきた。

「走れ！」

「え？何？どうなってんのよ」

真夏の問いかけには反応せず、孫一は真夏の手を取って走った。しばらく走って振り返ると、娘の姿はなかった。

どうやら逃げ切ったようだ。真夏を荒間田の元へ連れて行き、休ませると、最初に一色を発見した、

内蔵が散乱している部屋まで戻り、探索を再開した。

「寒っ」

孫市が入った通路はとても気温が低かった。所々霜も降りている。突き当たりの扉の中に入ると、さらに気温が下がった。そこは冷凍庫のような場所だった。

「佐々木くん……」

不意に孫一を呼ぶ声がした。声のする方を見てみると、そこには撫子の姿があった



# CHAPTER4

~~

「中山さん：何があったの？」

「ごめんなさい：」

孫一が優しく聞くと、撫子はコレまでのことを説明した。母親が病にかかっていてお金が必要なこと、

祖母や沢山の弟妹が撫子の帰りを待っていること、

逃げている途中で会った「戸塚大宝」と名乗る男から

「人肉料理」を作ることが晩餐会で優勝するための近道だと聞いたこと、

孫一達を料理すれば生かしてくれると言われたこと、

撫子は涙を流しながら話してくれた。

「戸塚大宝：」

孫一は撫子を陥れた人間の名前を確認するように呟いた。

「中山さん：他に何か知ってることはない？」

「：東棟一階の：子供部屋：」

あそこに林檎の形をした大きなドールハウスがあります料理ができたならそこに持っていくように言われました。」

「東棟一階の子供部屋：ありがとう中山さん

絶対に生きて、一緒に帰ろう」

撫子と共に地下から出て、撫子と食堂で分かれると、

孫一は東棟へ向かった。

東棟一階、子供部屋。

大善と来た時は気に止めなかった部屋だが、おもちゃが散乱している。

そこもしばらく掃除はされていない様だった。

確かに林檎型の巨大なドールハウスがある。

孫一はドールハウスの中に入っていた。

それは外からの見た目では想像できない光景だった。

扉を開けた瞬間目に飛び込んできたのは、

ずーっと下へと続く階段だった。その異様さに身構えながらも階段を下っていった。

「ドールハウスの奥がこんな所につながっているなんて……」  
階段を下りた先にある部屋には、

暗い紺のテーブルクロスが敷かれた大きなテーブルがあり、その上には、人間の頭や指、目玉等が乗せられた皿が

置いてあった。そしてテーブルに備え付けられた椅子にはあの娘が座り、それらの皿に乗っているものを貪っていた。

娘はしんどそうだった。

「アナタ：どうしてここにいるの……」

部屋の隅から声がした。そこには見覚えのある顔があった。

「美藤：夫人……」

「あの娘の食事の邪魔をしないで！」

夫人はそう言うのとテーブルの上にあったナイフで斬りかかってきた。しかし、夫人は普通の女性。

ソレを躲すことくらいは孫一にもできた。

「美藤さん……」

「こうするしかないの……あの娘が生きていくためには……」  
夫人は大粒の涙を流しながら言った。



「美藤さん……」

夫人のしていることが本当に間違っているのか……

その答えが分からなかった孫一は

何も言葉をかけることができなかった。

「この娘は私の……」

夫人が言いかけた時だった。

「が……」

娘が夫人の後頭部に噛み付いた。

「エエエエ……」

ガアアアア

うめき声をあげながらグチャグチャと夫人の死肉を貪っている。

孫一は動けないでいた。

「マ……マ……？」

少女の目には涙が浮かんでいた。

その顔には先程までの凶暴な色はなかった。

「もう……いや……こんなの……」

娘がすぎる様な顔で孫一に言った。

「ゴ、ロ、ジ、デ……」

殺す？ そんな事出来るわけがない。そう思った。

しかし次の瞬間少女の顔は豹変した。

「ウガあああああ」

「うわあ」

孫一は思わず傍らにあったナイフで抵抗した。

辺りは静まり返った。

ーぴちゃんー

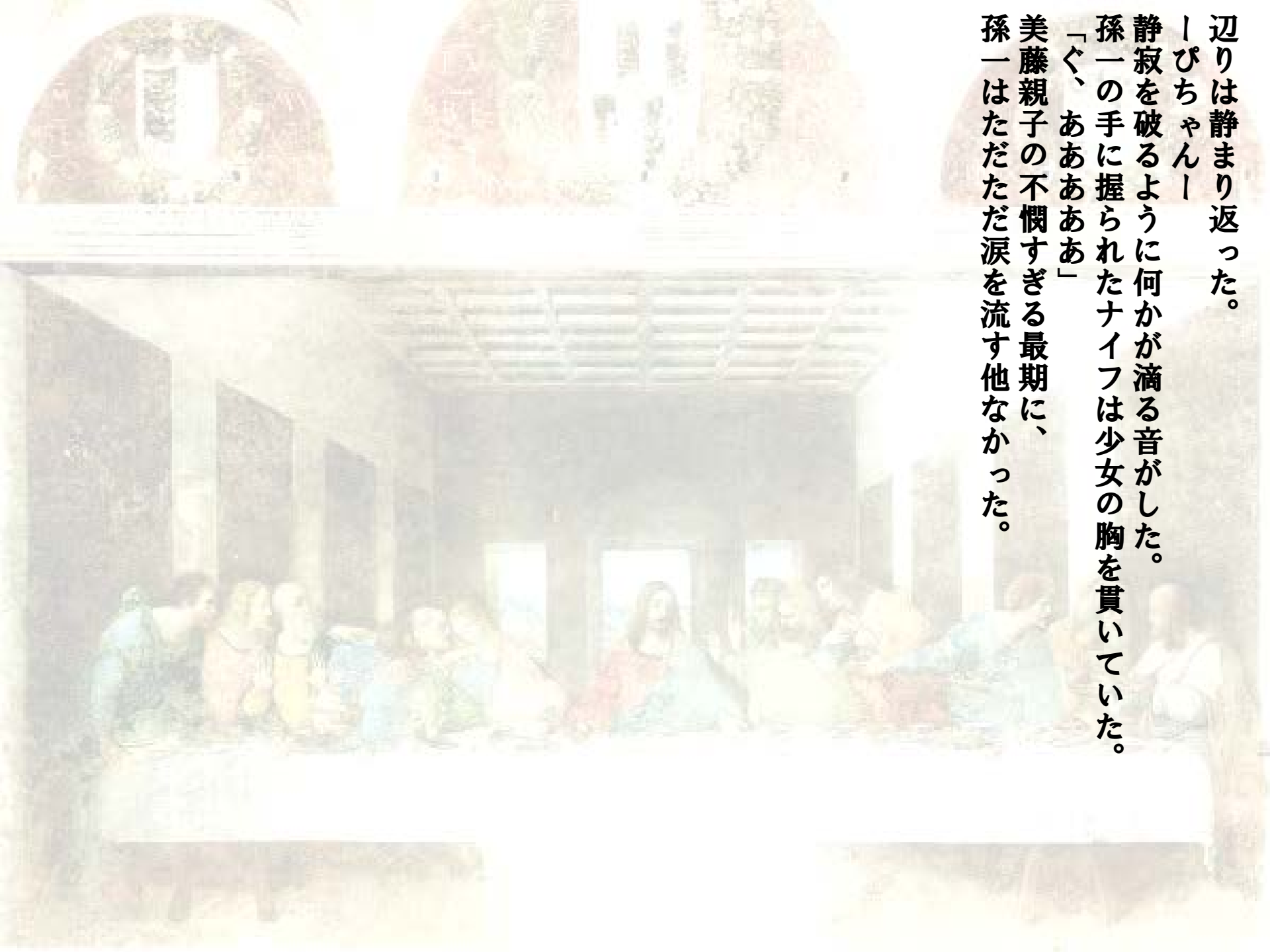
静寂を破るように何かが滴る音がした。

孫一の手握られたナイフは少女の胸を貫いていた。

「ぐ、あああああ」

美藤親子の不憫すぎる最期に、

孫一はただただ涙を流す他なかった。



An ornate, symmetrical decorative border in a light gray color frames the central text. The border features intricate scrollwork, floral motifs, and a central crest-like element at the top. The background within the border is a light gray gradient, while the outer background is dark gray.

# EPILOGUE

~~

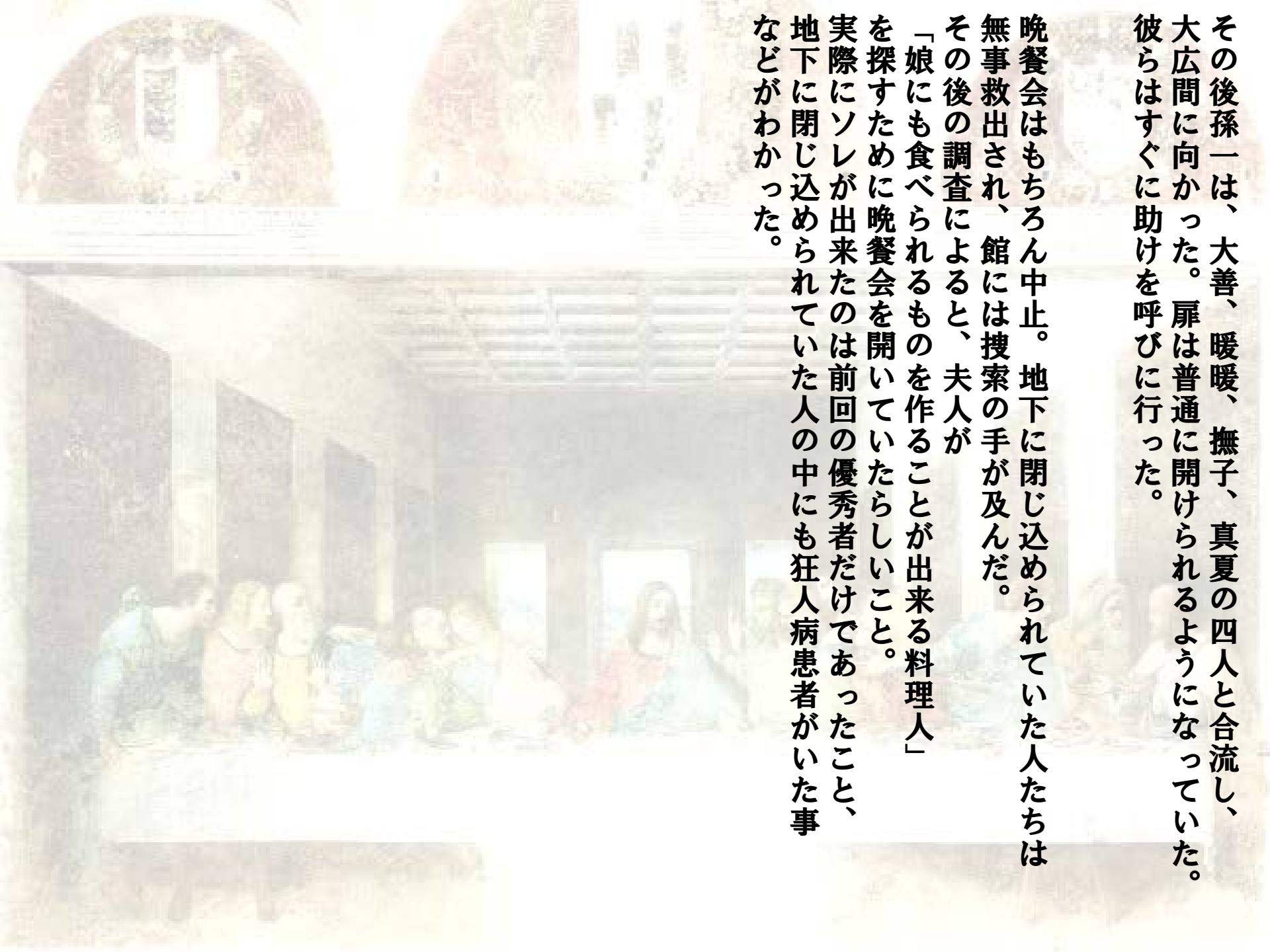
その後孫一は、大善、暖暖、撫子、真夏の四人と合流し、大広間に向かった。扉は普通に開けられるようになっていた。彼らはすぐに助けを呼びに行った。

晩餐会はもちろん中止。地下に閉じ込められていた人たちは無事救出され、館には搜索の手が及んだ。

その後の調査によると、夫人が

「娘にも食べられるものを作ることが出来る料理人」を探すために晩餐会を開いていたらしいこと。

実際にソレが出来たのは前回の優秀者だけであったこと、地下に閉じ込められていた人の中にも狂人病患者がいた事などがわかった。



沢山の調査員が館に出入りしているのを  
座って眺めている男がいた。

「あーあー

俺の職場を荒らしやがって…

まあそろそろ潮時かあ

国に帰るかねえ」

そういうと男は立ち上がり、

パンパンと尻についた土を払うと、歩き出した。

～Fin～